

## ライマン雑記(9)

副見 恭子<sup>1)</sup>

### 日本油田地質調査 1877

#### 1. 1877年(明治10年)の暮あけ

1877年(明治10年), フィールドブック L46 は, 正月三箇日が終り, 助手達がオフィスに年始に出かけた1月4日から始まる. ライマンは風邪をひき自宅休養中であつたが, 前年末の会計簿から判断すると, 15人に近い使用人およびその家族の世帯主として, 門松を立て, お節料理でお正月をにぎやかに祝つたようである. 5日は, 大鳥至介・山内提雲・助手等と共に浜町の写真館で写真をとり, 次の日, 地質学会が主催する深川富岡町の料亭で行われた新年宴会に出席した.

明治10年の歴史は, 西南戦争と上野公園で開かれた第1回内国勸業博覧会で代表されるが, ライマンは特に後者の影響を受けた. 8日の御用始めの2日後, つまり1月10日に, セネラル大鳥からライマンのオフィスを博覧会に引き渡すよう要請があつた. 続いて11日, 政府は各省の寮の廃止を発表, 大鳥の内務省から工部省への転属, とライマンの身辺に矢継早に変動が起つた. 彼は大鳥に従つて工部省へ移るのを予測し, 緊急問題は自分のオフィスを何処へ移転するかにあると見て取つたのであろう. 早速オフィスの家具や事務用品を一時内務省から平河町の自宅に移した. 1月31日に, 内務卿大久保利通(後に工部卿事務取扱伊藤博文と変更)に, 「日本油田地質測量報文1876年」を提出した.

梅の花がほころぶ2月3日から助手への物理講義が始まつた. 通常午後2時30分から4時までの1時間半の講義を週5回, ライマンは新たに通訳なしで日本語で行つた. このライマンの日本語で教授するアイディアは結果的には成功であつた. 教科書「Lardner's Natural Philosophy」の難解しかも深遠

な部分を助手が明瞭に理解し, かつ肝に銘じることができたのは, 心が通じた直接教授の成果の一例である. また助手のノートをしていねいに添削し, 手を入れたノートを週一回清書させた専心ぶりは, 魯迅著「藤野先生」を思わせる.

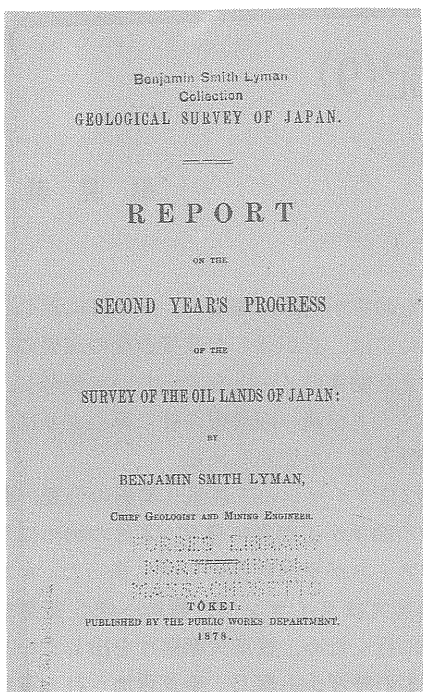
2月12日ライマンの工部省へ異動の公表, 翌13日は14人の助手が工部省に移り, 3月の始めにライマンのオフィスが平河町邸に正式に決つた. 4月書記・秋山美丸はライマンへ, 熊本へ向う友達を送りに横浜に行くため, 授業欠席届けを出している. 当時の熊本の戦況から察し, 急ぎ現地へ赴く友を送つたのであろう. 江戸の平穏な生活の中で, 一瞬西南戦争の切迫を感じさせる一コマである. この頃ライマンが「九州全図」や「熊本近傍里程図」を購入しているのも興味深い. 4月の宴会の席上で聞いた「国内不穩のため調査を見合せては」という政府高官の忠告を考慮したのか, 第一回遠江旅行の出発は5月2日となつた.

筆者はライマン日本油田地質調査第2回報文とフィールドブックのL46からL88を読了後, 一つの着想を抱いた. 遠江の平田製油所の産額やライマンの半田銀山操業の詳細な報告を書いたとしても, 誰も関心を持つまい. 明治初期の尾去沢銅山や大葛金山, 阿仁鉱山について知りたければ, 莫大な資料が日本に保存されているはずである. むしろ「こんな人跡未踏な処まで」と筆者の胸を打つた延々約千里のライマンの足跡を迎るべきだと思つた. しかしそれは予想外に大きな仕事であることが判つた.

森本良平教授・森本貞子氏のご好意で入手できた大正初期に訳された中村新太郎「ライマン日本油田調査第二年報」を読み, 中村氏でさえ, ライマンの書かれたローマ字の地名に悩まされた印象を受け

1) マサチューセッツ大学図書館ライマンコレクション委員  
8 Eaton Court, Amherst MA 01002, U.S.A.

キーワード: ライマン, 石油地質調査1877



第1図 ライマンの油田地質調査第二年の報告書  
(マサチューセッツ大学図書館所蔵)

た。また読者は連綿として続く地名や何時何分に宿を出た、峠を越したの時間の繰返しにうんざりするのではないだろうかと思ひ惑った。しかしながら、道なき道を、ちょうちんをつけて進まれたライマン、調査以外は心に何もなしとの気迫で困難な調査を成し遂げられたライマンを偲ぶと、忽然として彼の足跡を書くべきだと勇気が湧き上がった。

## 2. 遠江旅行(5月2日—5月17日)

1877年石油調査は2回行われ、第1回は遠江<sup>とおとうみ</sup>旅行と呼ばれた。5月2日から17日までのライマン調査旅行の日々を追ってみよう。

5月2日 晴天。江戸出発。主な同伴者は書記・安達仁造とコックの幸太郎。新橋駅から10時45分発の汽車に乗り横浜で下車。用事をすませ、人力車が待っている神奈川に戻り、藤沢・平塚を経て大磯の宿に8時18分着。

5月3日 雲。大磯7時10分にたち、小田原・芦ノ湖を眺めながら箱根峠4時42分、山中を過ぎてから暗くなりコンパスの字が読めず、7時48分三島着。

5月4日 7時36分出発。途中富士山のスケッチを

し沼津に8時13分。沼川を渡り(舟渡5銭)、前田村で昼食。1時より雨が降り始め、蒲原に3時55分に着いたが雨は止まず蒲原止。

5月5日 午前中は雨。ようやく日が照り出し1時46分出発。由比に近づく頃から強風となった。7時2分静岡着。

5月6日 この日曜日には午後雨が止んだので散歩し、浅間神社まで遠出した。

5月7日 静岡7時51分出発。大井川を渡り、4時19分遠江国榛原郡金谷の土を踏んだ。

5月8日 7時51分人力車で金谷を立ち、相良に12時40分に達した。午後は土地の専門家に会い、遠江石油の話に耳を傾けた。

5月9日 相良を7時50分に出て、平田の製油所、海老江、菅谷の油井、または石油地を視察し、5時26分相良に戻った。

5月10日 朝8時8分相良を南下し、白羽の油井を見て、池新田で昼食、その後朝比奈の油井を訪れ、1日を終え再び相良に戻った。

5月11日 雲。相良を8時16分に発し、男神・西山寺・白井の石油地に立寄った。菊川を経て4時13分小夜の中山を下り、日坂へ5時32分に到着。この日の行程は約7里であった。

5月12日 7時23分日坂を出て、源兵衛と飛込沢を訪れたが、どちらも石油の痕跡さえ見当らず、10時に藤枝に向った。3時16分藤枝着。

5月13日 7時40分藤枝から輿に乗って谷<sup>やいば</sup>稲葉と内瀬戸の井戸に寄ったが、石油は全く発見されず、すぐ西南に足を向け10数年前に掘った井戸からガスが噴出した越後島村を訪れた。ここで実際の調査は終了し、岡部・静岡を経て夜遅く10時19分興津に着いた。

14日と15日は雨天を冒して興津から三島に達し、16日は箱根を越えて湯本・小田原を経て大磯で一泊。17日は鎌倉の大仏と円覚寺を訪れ、神奈川から汽車に乗り、新橋駅に7時15分着、無事平河町の自宅に戻った。

記録によると、16日間の遠江調査里程は、鎌倉遊らんを含め144里、平均1日約8里とある。1817年頃、静岡学問所で化学を教えていた米人 Edward W. Clark が、海老江で石油を見つけたのがきっかけとなって、遠江で石油採掘熱が起り、石油のにおいさえすれば、さく井が行われた。ライマンは遠江

### 3. 秋田・山形・新潟県油田長期調査旅行 (7月13日—9月27日)

7月になると、助手の山内・山際・前田本方・秋山は越後と信濃へ、桑田・西山は秋田へ、杉浦と坂は遠江へ、賀田と島田は越後松山方面、稲垣と前田精明は越後蒲原郡方面調査地へと、それぞれ出立した。

#### 日光まで (7月13日—7月17日)

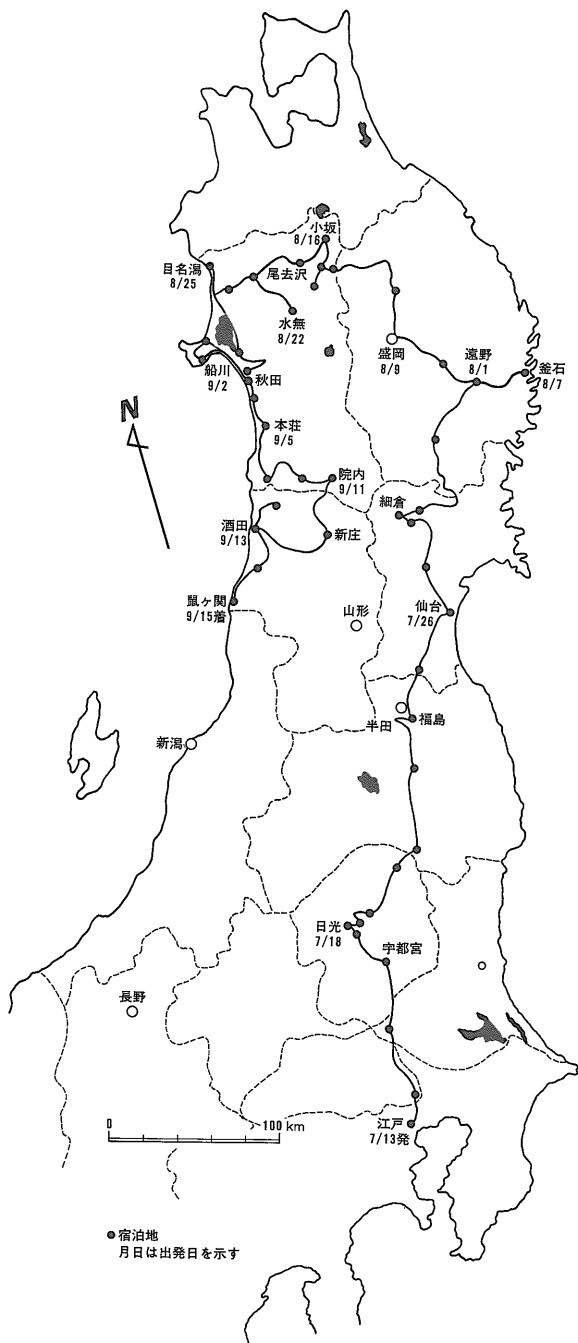
さて、ライマンは7月13日、秋田県油田長期調査旅行のため、午後4時15分まず日光へ向った。コック幸太郎の妻と娘、従者の妻は、見送りかたがた千住の通運まで一行に付いてきた。ライマンは今回の調査旅行で、この通運の分社、取次店、出張所を休憩所に、郵便局や案内所に、時には宿として大いに利用しているのが目立つ。通運とは内国通運会社の略で、全国津々浦々、網の目の様に拡がり、明治10年は正に通運独占時代のピークであった。千住を6時35分に出発し、草加から暗い道を進み、8時49分に大沢の旅籠に入った。

第2日は人力車のスプリング変えに手間取り、午後大沢を出て、粕壁・幸手を経て古河で宿泊。翌日はなつかしい筑波山の姿を小山辺りで見ながら6時59分に宇都宮に達した。

16日早朝6時35分徳次郎・大沢・今市への日光本街道に移り、杉並木の偉観に圧倒されながら午後1時14分に鉢石の鈴木宿に到着した。会計簿旅中荷物運搬仕払の項目の「宇都宮より日光まで人力車五両荷物運搬車とも3円60銭」と「宇都宮駅より日光まで幸太郎人力車50銭」から大体ライマン調査隊の規模が想像できよう。17日中禅寺まで足を伸ばしたが、足尾には行かず、代りに足尾銅山の歴史・鉱脈・銅鉱・産額・操業等について人から聞き書き留めた。付け加えると、ライマンが大切に保存した日本の雑誌の中に、風俗画報増刊「足尾銅山図会」がある。この雑誌は世に知られた田中正造と足尾銅山鉱毒事件が騒がれたした明治33年の発行である。ライマンは旅行中、よく神社仏閣を訪れた。日光でも「東照宮奥院まで見料案内2人 6銭」および「大猷院前同 1銭2厘」の記録が残っている。

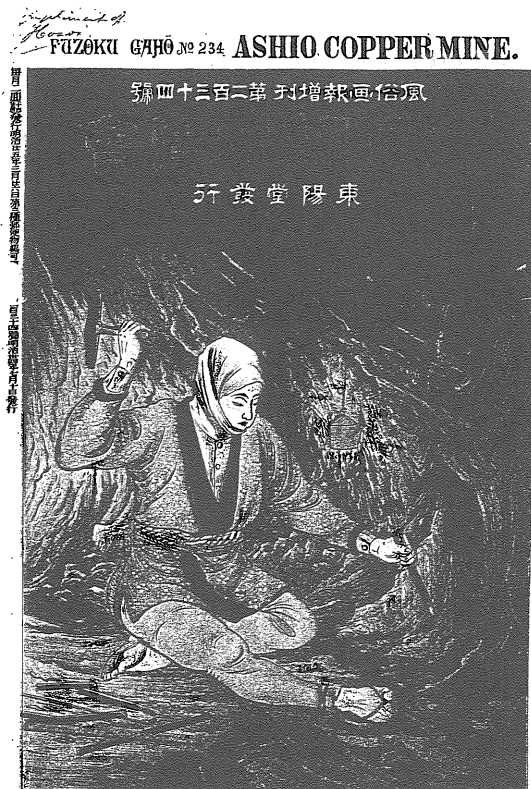
#### 遠野まで(7月18日—7月31日)

7月18日日光を去り、今市から会津西街道へ折れ、大桑で西へ進んだ。目的地は佐下部銀鉛山と小百村銅山であった。その日は車のアクセルの修理で



第2図 ライマンの秋田・山形・新潟油田長期調査旅行  
旅程図

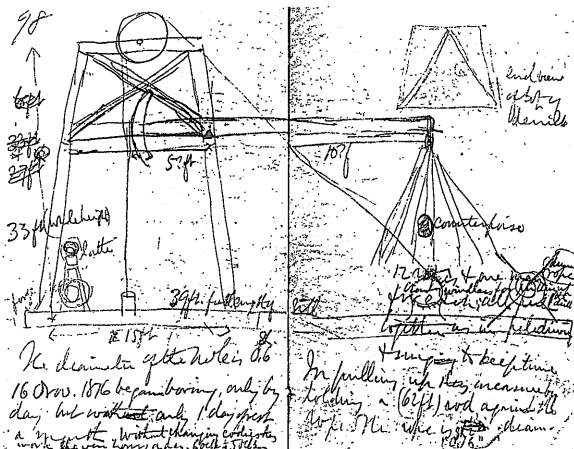
石油の将来性のないのを見通し、報文の中で、製塩・茶・砂糖・米の生産を奨励した。20世紀末の今日、唯一残った物産は茶である。



第3図 「足尾銅山図会」の表紙(風俗画報, マサチューセッツ大学図書館所蔵)

栗原に泊り、翌7月19日、白百合があちこちに咲き乱れる道を通り、佐下部鉱山へ辿り着いたが、鉱山は取るに足らず、その先の小百村の協道調査も止め、高德へ出て、夕刻日光北街道の船生に到着した。5時3分宿に着くや雷雨襲来。あくる日はすっかり晴れ上り、6時29分に宿を出て、日光北街道沿いの玉生・矢板と過ぎ、箒川を渡って、蒲葉・中田原に至った。ここはすでに奥州街道である。その夜は越堀の昨年明治天皇が休まれた本陣に一泊した。

7月21日はいよいよ奥州入りで三台の人力車で出発した。「次の駅まで43丘陵がある」の次の駅とは芦野であろうか？ 雨が降りしきる中を12時7分に白河通運出張所着。雷雨が納まるのを待ち、2時46分再び旅の人となり、6時20分に無事矢吹に到着した。翌日ライマン一行は矢吹から笠石・小和田・日和田・仁井田・を通過し、二本松で一日を終えた。23日二本柳・八丁目・瀬ノ上と奥州街道を北進し、ライマンが目指している目的地が半田銀山

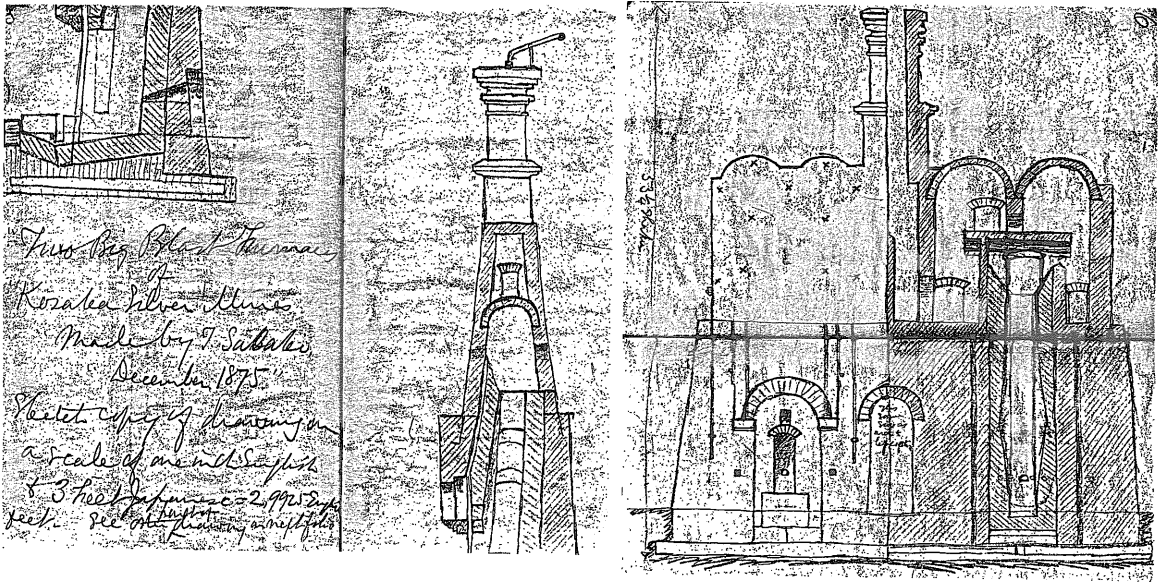


第4図 宮城県三本木のボーリングマシン(フィールドブック L59, マサチューセッツ大学図書館所蔵)

であるのが明らかになった。4時58分に半田鉱山オフィスに一応着いたものの桑折に戻り宿に入った。ライマンは半田鉱山を一日かけて調査した結果をフィールドブックに克明に書き残しているが、彼の目には昔日の面影なく将来性のない鉱山として映った。

午後5時過ぎ半田を出て、藤田・貝田を経て宮城県入りし、越河から更に1里半の夜道を白石まで進んだ。7月25日は白石6時33分発、金ヶ瀬・岩沼付近では“はえ”に悩まされたとある。植松・増田・中田を通して仙台に5時14分に着いた。宿近くで木製の盆 Omorigi を買ったとあるのは宮城名産「埋れ木細工」に違いあるまい。翌日6時15分発、峰また峰を越え仙台から9里半の三本木に着いた。ここで石炭の良層を求めボーリングが行われていて、工部省の役人が監督していた。翌27日の細倉鉱山への道は長くけわしく、高清水から築館まで丘陵が続くので、三人が人力車を引くことになった。12時54分築館、そこから西へ向かい、柳目・真坂を通り、雨の中を6時51分川口の通運宿舎へ入った。

ライマンは約1日半細倉銀鉛鉱山を調査した。鉱山の採掘は殆ど放棄され、ごく少数の鉛と銀が製錬されていたが、フィールドブックに24ページ余りの細倉鉱山レポートがある。29日の午後には岩ヶ崎へ足に向けた。岩ヶ崎一泊。翌朝6時19分出发し、金成・有壁を過ぎ県境を越えて一関へ、ここから道がらくになったのか、なおも山の日・前沢と進み、6時18分水沢に到着した。晦日朝6時9分



第5図 小坂鉱山の溶鉱炉(フィールドブック L67, マサチューセッツ大学図書館所蔵)

水沢を立つ頃、少しづつ霧が晴れて、ライマンの眼前に見渡すかぎりの平野が展開した。しばらくして急流北上川を渡り、人首・五輪峠・鮎貝峠と北東進した。

午後7時37分遠野から2里2町のMasudaで、ちょうちんの灯の下ライマンは、街道のスケッチをした。「数日後盛岡へ行く際再び通る道」と走り書きがある。Masudaは鱒沢の間違いであろう。暗い道を「あと何里」と焦りながら進み、約3時間後、遠野街道の終点遠野に着いた。

#### 釜石を経て岩手県下(8月1日—8月10日)

8月1日は6時21分釜石街道を東へ急いだ。森下近くで人力車を引く人3人押す人2人となり、仙人峠・大橋・小川を経て6時5分釜石に到着、この日も強行軍であった。釜石には8月6日まで滞在した。大橋・新山・元山・除キ澤・佐比内の鉱床や溶鉱炉を見学した。ライマンは報文で、製鉄事業を勧告するには、長期の地質および地形調査が必要なのを力説している。

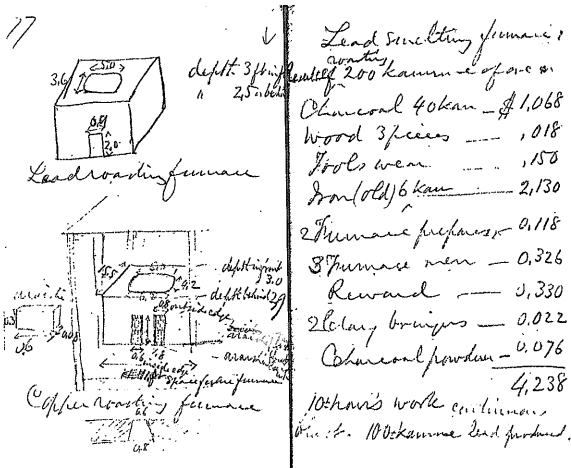
釜石を7日に出て鱒沢より北東に転じ迷岡、達尊部を経て大迫へ。フィールドブックに大迫付近の砂金や温泉について数行の記録がある。8日大迫から赤沢・乙部を経て盛岡着。9日は岩手山に登り、岩手山神社に詣で夜は寺田に泊った。次の日は岩手最後の日で、いよいよ本舞台の秋田入りの日で

もある。寺田6時57分に出発、荒谷まで4里12町、田山2里29町、湯瀬3里14町 計10里9町でさして長距離ではないが、火山岩でゴツゴツした悪路と、峠にしばしば挑まねばならなかった。寺田から1里の所で人力車の車を取り外し、ライマンは輿で前進した。梨の木峠は急峻で歩くほかに、やっと荒谷通運に10時59分に着いた。再び輿にのって今度のはえの襲来を受けながら進み山一つ越え、間もなく田山通運に2時26分に達し、兄畑から秋田県に入り5時24分湯瀬温泉の旅籠に到着した。明日より旅行の主眼である秋田調査が開始される。

#### 尾去沢・小坂・阿仁鉱山(8月11日—8月20日)

8月11日花輪を通して秋田最初の鉱山、尾去沢銅山に12時3分に着き、早速鉱脈、採鉱場、製錬所の調査をした。尾去沢で一晩泊り、翌朝7時大葛鉱山へ向った。この金山は8ヶ月程休業後、尾去沢銅山の所有者の岡田会社が最近買い取り過渡期にあった。13日は大葛から尾去沢に戻り、その夜は宿を花輪にとった。通りに干した紫根染や藍染の布が美しかったのであろう、知識欲旺盛なライマンは「Ai」と覚えた名をフィールドブックに書きとめている。

次に訪れた小坂鉱山は花輪から北約5里にある銀山で、ここも7月に岡田会社の経営下に移っていた。2日間小坂で調査を行い、翌朝9時56分出



第6図 阿仁鉱山のかまど(フィールドブック L68, マサチューセッツ大学図書館所蔵)

発、毛馬内<sup>けまない</sup>で津軽街道と別れ、土深井を経て6時7分十二所<sup>じふに</sup>通過、温泉(大滝温泉?)調査後暗くなり道に迷ったが、遂に8時11分扇田に着くことができた。

「加護山へは陸路だと10里、水路だとそれよりも距離が短い」のメモで初めて次の調査地が加護山であるのがわかった。17日7時53分舟が陸を離れると、へさきの1人が竿で、とももの2人が櫂でこぎ始めた。3人の船頭が唄をうたってゆるやかに米代川を進むうちに霧が晴れた。川沿いの断崖や岩石はライマンの興味をそそった。鷹巣で舟客一人が下りたのが12時12分。2時53分阿仁川の河口を過ぎ、小繫<sup>こつな</sup>を通過し、4時42分上陸した所が加護山であった。棧橋の掲示板によると、明治8年現在、男約216女約220の小さな村で、加護山を製錬所は阿仁銅山の銅と、太良鉛山(the Daira lead mines)の銅を精製し銀を抽出した。

翌日11時25分太良視察のため再びライマンは舟の人となり、藤琴川から粕毛川に入り、5時10分金沢に着いた。加護山から4里とあるが、筆者の地図で金沢の所在を突止めることができなかった。太良への道は険峻な山路が待ち構え、へたばる人夫をしたつた激励しながら月光の下を徐々に進行し、とうとう8時25分目的地に達した。19日太良と矢櫃<sup>やび</sup>の鉱山および製錬所で6時間余り過ごし、午後雨の中を前夜の険路を通り金沢の船場に2時28分到着、2分後離岸、5時46分に加護山の棧橋に到着した。

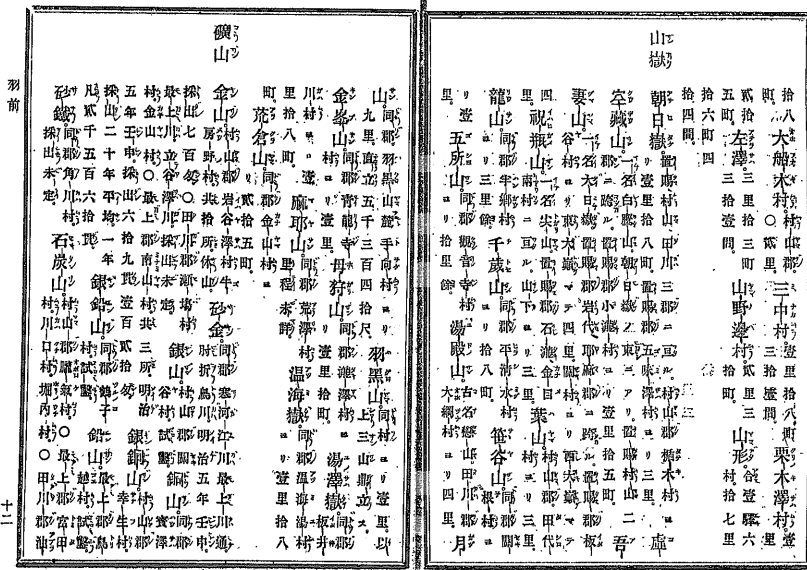
20日は6時33分加護山から小さな舟で米代川を

南下し、7時46分阿仁川に入り、木戸石通過、12時8分米内沢、五味堀と半日がかりの舟旅は6時53分水無に上陸して終った。水無から約1里に位置する阿仁鉱山は、当時活気ある銅山であった。しかし珍しい化石や鉱物は江戸の内国勸業博覧会へ送られていて見られず、その上お盆で何かしら気がゆるんだ感じであったらしい。

秋田油田(8月22日—9月14日)

22日朝6時18分水無を去り、12時45分米代川に水路を変え、飛根を通過し5時21分鶴形に到達した。鶴形を拠点として第1日は駒形の石油地を、第2日は水沢と目名瀧の油井を訪れた。後者の2ヶ所は秋田県北端にあり海に近い。25日は鶴形を出発、豊岡・鹿渡・天瀬川とどんどん南下し、大久保から26町にある龍毛村に一泊。翌日は龍毛<sup>つきの</sup>と槻木の石油と油煙工場、湊の製油所、八橋油田、濁川油井と巡察した。この一帯は後日秋田油田の中心地となった。

27日から30日の4日間雨天のため久保田に滞留したが、その間濁川測量中の桑田と西山の訪問を受けたり、桑田を伴って県令を訪れたり、ゼネラル大鳥に手紙を書いたり忙しい日が続いた。8月31日八橋の橋を渡り、天王・舟越と男鹿半島を行くと、洋洋たる日本海が眼の前に拡がり、脇本・羽立の先でライマンは鳥海山の姿をスケッチした。別名出羽富士の姿は彼の心を奪い、その後何度もフィールドブックに描かれた。6時14分船川の海拔10フィートにある宿に入った。



第7図 「日本地誌提要(マサチューセツ大学図書館所蔵)」から、ライマンが読めるよう朱でふりがなを付けている。

雨天のため1日遅れ9月2日、雨上りの泥んこでつるつるした山路を通り、船川・増川・中間口の油田を視察した。翌3日は7時27分フェリーで湊へ着き、製油所に立寄り、久保田の宿で一時くつろぎ、2時13分南下が始まった。その日は遅くまで旅を続け7時56分道川に着いた。翌朝6時32分来た道を戻って勝手村へ行行ったが、sodai(總代?)が「石油は村に全くなし」と言うので道川村へ帰り、道川石油地と二古油田を訪れた。ライマンはよく「スプーン一杯の石油程度」と表現したが、道川も二古もこの表現にあてはまる。再び羽州浜街道を進み、松ヶ崎、芦川油田に寄り、親川、石脇、本荘の港町に6時36分に達した。

9月5日から5日間由利郡の点々と散らばる油田・油井・鉱山を調査しているが、どれもこれも特筆するに足るものではなく、あちこち約20ヶ所を測量し、鳥海山登山口である横岡まで足を伸ばしているのが印象深いくらいなものである。金山・小国・大森・伊勢居地・横岡等を訪れ、東へ進み小菅野・吉沢・杉沢と調べ9日5時近く笹子に出た。

10日院内銀山を6時間余り視察したのみで、翌日8時40分山形県新庄へ向った。山道は極めて険しく人力車を引っぱったり押したり、ライマンは再三歩かねばならなかった。雄勝峠10時29分通過、秋田県はすでに背後となり、11時37分及位通運へ、

主寝坂は急峻なためまたもや歩いた。中田を過ぎた後も数回人力車に乗ったり下りたりを繰返し金山通運に着いた。しかし行手になお難所が続き泉田に達して、ほっと一息ついた。6時26分新庄通運宿舎に入った。翌12日宿を6時48分に出て、本台海から舟で最上川を下った。舟の行き交い激しく、餅売りの女二人が舟を漕いで、ライマンの乗っている舟を執拗に追いかけるハブニングは面白い。1時30分上陸、地名が記されていないが、前後の関係で清川と想像できる。狩川・南野・余目を経てフェリーで川を渡り、酒田に近づくやライマンは視覚・聴覚・嗅覚で酒田が活気に満ち満ちた港町であることを知った。

9月13日7時20分宿を出発、曇で鳥海山は見えず、秋田三崎街道を北へ進んだ。藤塚から内陸に入り、越橋・荒目・蕨岡、そこから6里にある草津石油地を調べた。この日の道程は13里余りだったが、酒田に夜遅く11時に戻ったのは、蕨岡から草津への道が迷路だったからであろう。翌朝酒田を別れ、鶴岡を経て大広村で一泊した。

新潟県下(9月15日—9月27日)

15日は羽州浜街道を三瀬・小波渡・温海と急ぎ、鼠ヶ関から歩いて越後最初の村、中浜に入り、そこから人力車で大川に着いた。翌朝輿が用意された。案の定、荒川・垣之内・蒲萄と山岳地帯の旅で、ラ

イマンは溪谷、稲田、林、小高い丘の眺めを楽しんだ。塩野町に出て、猿沢三面川を渡って村上に8時5分到着した。三日市への沿道はあちこち稲刈りの最中であり、炭坑がくずれ立入禁止の赤谷鉱山を下る山路には柿がたわわにみのり、越後はすでに秋のたけなわであった。

19日から22日まで去年旅した新津・与板・脇野町・妙法寺等を訪れ、なつかしい出雲山・黒姫山・妙法山にも再会した。9月23日高田を立ち、新井宿・除戸・長沢を経て信濃入りし、富倉およびその周辺の杉ノ沢・狐平・濁池等を巡回した。何れも「多くの油井あれど石油なし」の状態ですぐ次の涌井の石油地、関口の油井、沼新田の鉱泉へ移り当夜は古海<sup>ふるみ</sup>に宿をとった。翌朝古海石油地の後、北国街道に出て一直線に善光寺への予想に反し、ライマン一行は牟礼から峯を越えて新町に一泊した。27日雨の中を神代の石油地と鑄工<sup>かじろ</sup>場や伺去<sup>しきり</sup>真光寺として上松の油井を訪れ、遂に長野に6時過ぎに着いた。

#### 4. 長野のでできごと

ここでライマンが長野に3週間余り滞在しなければならぬ思わぬ出来事が起った。事件の中心人物である安達仁造の「来曼先生と古河市兵衛翁」の記事で真相がつかめることができた。安達は石油地玄藤寺村の農家で食べた松茸飯から下痢を起し、ライマン一行の後を追いかごで山越して長野に着いたが益々悪化するばかりだった。少し長いが安達の文を引用する。

長野の旅舎で床についてみたが病状は悪くなるばかりである、然るに先生の長野に於ける鉱産物の調査はすでに了り、石川県へ赴く筈になっていたの、先生に私を置いて発足されることを懇願したが先生は「報告文を書く都合があるからしばらくここに滞在する、君も安心して養生したまへ」と云はれた、助手として同行した私は、先生の調査旅行が如何に多忙であるかを知っていた、又先生が研究の外、心中何ものも無いという気性も知っていた、報告文を書くとは口実で実は私の病気を案じられての滞留であることは余りに明瞭であった、それを思うと先生の看護を受けながら私は感謝の涙にくれていたのである。(注1)

またライマンが絶えず安達の病状を聞き相談した医者がかなかなかの人物であった。彼はライマンの助手前田精明の知友で入牢中の佐久間象山からオランダ医学の講義をきき、感ずるところあって医者になったと言う。彼の赤痢を薬湯で治した医者について、安達は次のように述べている。

その医者もまた非常に熱心な人で毎日人をよこして湯をかへさせてくれたし、いよいよ私も動けるようになってかごで金沢へ先生と赴くことになったが、その時丸薬もくれ、種々養生訓もしてくれた、その生命の恩人の姓名を忘却したとあつてはまことに相済まぬ次第である。(注2)

ライマンのフィールドブックで医者の名前 Kaneko をようやく見つけ、更に「長野医師金子氏21日分1円」を会計簿から探し出した。安達の医療費が21日分1円とは！目を疑うばかりである。当時西洋ろうそく10袋(28日分)が1円90銭であり、幸太郎の月給は8円であったのを付加えよう。

#### 江戸往復

10月10日突如フィールドブックは上田 午前11時20分 追分 7時25分 高崎 5時57分と旅の記録に変わった。ライマンが江戸を目指して走っているのは想像できるが、彼の規則正しい日常生活を破った原因は何であろうか？

熊谷11日午前1時、そこから早馬車で10時32分に江戸筋替馬車終点に着いている。その日と翌2日にかけてライマンが取り組んだ問題は内容が明らかでないが、主因は幸太郎の養女の件であった。12日には幸太郎の全幅の信頼を裏切らず、ライマンはひとまず問題を解決している。

私のお会いしたライマンの助手の孫、ひ孫の方々が「ライマン先生」と言っても今でも敬愛していらっしゃるなぞの答がこの辺りにあるのではなかろうか？ライマンは30代の働き盛りであったが、彼の6日間のカリスマ的行動に感銘を受けた。江戸約2日間の滞在中、大鳥に会い、横浜へ出かけ、本郷の病院へN(野口?)を見舞ってさえている。

13日午後9時30分平河町を出発、10時10分江戸を出て14日高崎午前11時55分、坂本に6時29分に着き一泊。15日坂本を朝6時10分に立ち、午後2時37分に上田、長野に8時27分に安着した。すぐ

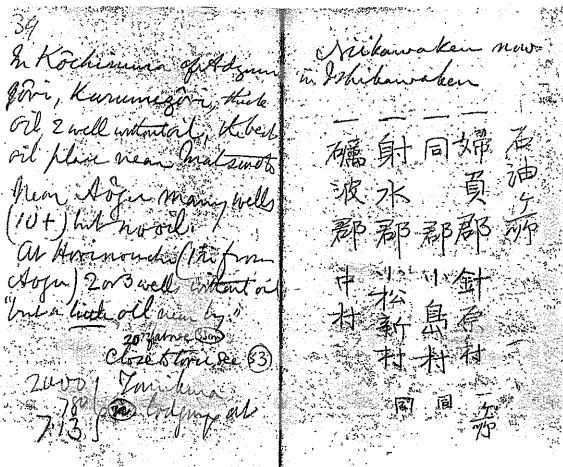


に前日長野に着いた山内・山際・前田本方・秋山の訪問を受け、1時間ばかり話した後、今度は彼等の宿へ行って調査プランや安達について語り、宿に戻ったのが午前12時30分、最も長き6日間であったに違いない。

### 5. 再び旅路へ(10月22日—12月8日)

遂に出発の日が来た。第1日は輿に乗り北国街道を外れ北西へ進み途中地獄谷の燃上るガスをみて、けわしい、ぬかるみの山道を通り、峯を越えて新町まで旅行した。だんだん山は高くなり北アルプス北部へ奥深く入る。二重を過ぎてしばらく青具へ行く道を見失い、その上雪が降り出し苦難の旅であったが、ともかく千見の宿に着き第2日目を終えた。10月24日青具周辺の石油とガスを調査、美麻に近づく頃雨が上り、紅葉の美しさにライマンはしばし足をとめた。堀之内の油井近くで雪がちらほら降り始め急ぎ塩島新田へ足を向けた。沿道でライマンが見た降雪の中を黙々と稲穂を集める農夫の姿は信濃の風土のきびしさを語る。氷雨がはげしくなり塩島新田で一夜を過ごすことになった。翌朝は快晴、積雪を見る。日がさして山々は銀色に輝く。この日難所中の難所に行くライマンの心中は如何であったろうか？ ライマンが立寄った石油地切久保から判断し、手許の地図の新田は塩島新田であろう。ライマンが見た小さな石像の列とは百体観音であろう。正しく白馬三山、白馬岳・杓子岳・鍮ヶ岳が真近にそびえる雪どけの千国街道の塩の道を、雪ぐつをはいた人夫と共に遅々として慎重に前進したのだ。フィールドブックに「Very Steep」とある。千国通運に11時18分。この辺りのガス地を訪れ、小雨の中を、下り瀬通運へ12時55分に達し、十分休憩した後、2時30分輿で進んだ。フィールドブックに「Moshi suberuto」とある。この日本語が難路に行く恐しさを言い尽していると感じるのは筆者一人だけではあるまい。くたばる人夫を力づけて石坂着。ここで米を積んで南へ行く雄牛、北へ帰る雄牛の群にあった。米馬くるまに4時41分無事着き一泊した。

26日は晴天 6時52分に起床後運動して体を温め出発した。県境を越えると次第に丘陵は低くなり、10時44分山之坊通運に到着、これより山路はけわしくなるが、海が見え始めライマンは寛いだ気分



第8図 フィールドブックに書かれた日本語(フィールドブック L79, マサチューセッツ大学図書館所蔵)

なったのか、明星嶽をスケッチした。小滝の夏小屋・小滝の岡を経て根小屋3時21分、雨が降り出し、闇が迫りちようちに灯を付け糸魚川へ急いだ。7時27分糸魚川の宿についた頃は頭上に星が輝いていたが一日のしめくりに「当夜風雨強し」とある。風雨のため1日遅れ28日出立。旅のコースは糸魚川—姫川—田海—市振までの北陸道で、途中山岳地帯に入り大沢で石灰岩中の化石を調べたのと、名にし負う親不知をぬれながら通ったのがその日のハイライトであった。

翌29日越後を後にし泊まで来ると魚津からの役人が出迎えた。ライマンは「また今朝3時魚津から警官2人が市振にやってきて、5時に安達と打ち合せた。彼等は昨夜11時ここ泊を通過している。どうも我々の動静を糸魚川からキャッチしたらしい」と書いているが、この2人はすでにライマン一行と行動を共にしていた。形式張った事がきらいなライマンのしかめ顔が目に見え、魚津へ向う一行のライマンの描写はこっけいである。「私の背後に警官1人、その後安達と幸がかごで続き、次に魚津の役人が人力車で、もう一人の警官は多分先へ行ったのだろう。そうだ！ 彼は先導して進んでいるに違いない。これでは全く逃げだすことはできない。道理で沿道の人々が我々を凝視している。随員に免じて、我々は葬式行列ののろさで進んだ」。ライマンの心情を察すると同情するに余りある。三日市の手前で数人の yakunins に迎えられ4時40分魚

津に到着した。夜は富山区長を含む5,6人のyakuninsと泊から一緒だった役人がライマンの宿を訪れ越中調査について語り、県令から贈られたシャンペンでライマンと酒杯を交した。ライマンは東部山地は積雪数フィートで鉱山調査は無理であると悟り、30日魚津を立つ前に頼まれた鉱石・鉱物の標本に名をつける仕事を終えると、滑川・水橋を経由富山へ西進した。

富山でも鉱物標本を鑑定し、11月1日午後神通川を渡り、針原の石油地に寄って小杉駅の宿に5時48分に着いた。2日は小杉駅の油井・小杉村・利波新・今井・高来<sup>たかき</sup>のガス地を続けて訪れ、午後には高岡・立野・福岡を通り加賀に近い今石動<sup>いまいすどう</sup>まで進んだ。3日田川村の化石をみて金沢へ赴いたが、途中の険しい山路は有名な古戦場倶利伽羅峠<sup>くろがら</sup>に違いない。雨天のため4日間金沢に滞在中、金沢博物館の鉱石標本の鑑定をやり、仕事終了後は安達と連立って勸業試験所の鋳物・織物・養蜂等の作業を見学するのを楽しんだ。

9日やっと午後に晴間がでたので出発、松任・柏野・栗生・寺井と月光の下なおも旅を続け7時23分小松に達し、翌10日は遊泉寺銅鉱山の鉱脈や製錬操業を視察した。金平へ向う夜道で度々ちょうちんをつけた人々にすれ違い往来の激しさを描いているが、九谷焼の大聖寺や小松、また栗津温泉への通路だったからであろう。11日と12日は金平銅山を訪れ、12日午後栗津温泉へ、そこから山代に向うが、那谷を過ぎてしばらくしてフィールドブックL88が終った。

L89からL128(11月12日 1877—11月7日 1879)の40冊が現在行方不明であるので、「日本油田地質測量1877年報文」の英文および中村新太郎和訳と幸太郎の会計簿を本にしてライマンの足跡を追う外はない。

11月10日夜山代に無事着き一泊。山代から山中<sup>へぎたに</sup>温泉へ。3日間雨のため山中に滞る。その間片谷と

市ノ谷の黒鉛鉱床および近くの高陵士を訪れ、福井への途中、山代陶窯に寄った。降雪のため福井に5日留まった。深い積雪で大野郡の銅山調査を断念し、提出された鉱石と鉱物の標本で鉱山の概略をつかむことができた。

11月22日福井から江戸に向って出発。武生・栃ノ木峠を越えて木之本、琵琶湖東岸の長浜を過ぎ、関ヶ原から中山道に入り、鶯沼・中津川を経て妻籠に達した。ここから中山道を外れ飯田へ、政府の要請で高遠と飯田間の鹿塩の塩産地を訪れている。信濃の高遠から甲斐の葦崎へはどの道筋をとったのだろうか？ フィールドブックが存在しないのが残念である。甲斐では透明水晶を産する黒平<sup>くろへい</sup>の採石場を訪れた。それより甲州街道に沿って笹子峠を通り、八王子、日野を経て遂に12月8日無事平河町に帰宅、ここに全距離860里(私事の長野と東京間の300里は数えず)の長期地質調査は終了した。

## 6. おわりに

筆者は地質家にとってフィールドブックは彼等の生命であるのを知った。だからこそ、石油調査旅行中のライマンの喜び、失望、興奮、あまたの感情が直かに筆者に伝わったのではなからうか？ また千国街道の積雪した難路で書いた「Moshi suberuto」の走り書きがライマンの緊張した声と聞えたのであろうか。その上フィールドブックのページから私心なく、目を将来に置き、謙虚で高潔なライマンの人柄が鮮やかに浮び出たのはライマン研究者にとって僥倖と言っても過言ではあるまい。

(注1)(注2)

安達仁造(1936)：来曼先生と古河市市衛翁，(Reprint of 石炭時報 1936) p. 23-30.

FUKUMI Yasuko (1993): A note on Lyman (9)—Oil survey of Japan, 1877—

<受付：1993年5月12日>